

No.75 植松 奎二 「浮くかたち一赤／垂」

Keiji Uematsu

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成8) 年 11月15日付 立川市市報記事より

植松圭二は色、形、素材という彫刻の三要素のそれぞれ異なったものの組み合わせで制作することが多い。

今回の作品の場合、材料は、ステンレス、鉄、石であり、色も黒と赤（石の灰色も）、形も三角錐、長方形（石は円か）である。この違ったものによる構成は見るものを不安に陥れるし、彫刻が構築的なものだと思っている人にとっては不思議な造形だ。その上、この形についても、遠くからは立体に見えたものが近くに寄ってみると薄っぺらな板であることに気付く。目という身体の機能が先入観で見ているものを裏切ってみせるのだ。「驚きと発見」というファーレ立川のテーマにぴったりの作品のひとつだといえよう。

作家のメッセージ / 日本住宅公団（現：UR 都市機構）「ミニ通信」より

この作品は地球の記憶の一部を残している。

自然石と真赤な円錐体と鉄といった異質素材の鮮やかな対比の組合せからなっている。

鉄板の上に中空に留まる石のある一点の力が集中する。あるいは放出する。

単純ながらも力強いフォルムで成り立っている。

円錐体の先端と自然石、ここには新しいエネルギーの場かが生み出されている。

地球の引力と重力、支えと重量、重さとバランス、物の存在のあやうさ、空へ浮かび上がる浮遊感、人間と自然とのかかわりがある。

車道と歩道との境界に新しい風景を作り出し、人々が身体で感じとれるような空間にふれるような場でありたいと願っている。

又、作品がつねに息づき呼吸しているのが感じられる場を創りたいと思っている。

彫刻が置かれることによって空間を生きた形にすること。

空間の安定と空間の崩壊の境目にある関係が見えてくる。

--宇宙の如くそこにある全体的な構図や、物体の不確かな存在や、それら相互の関係が、もしその内のたった一つの要素が欠けたら、瓦解してしまうだろう。

そういったものを創りたいと思ってきた。

全体の関係を維持しているものは何であるのか、又、その関係をこわして、まったく別の関係を生じさせるものは何であるのか、それが僕にとってきがかりなことである。--